

気になるホン・ほん・本

小林幸子歌集
『場所の記憶』

(妙子書房)

二〇〇四年夏から昨年初夏までの作品を収めた第六歌集。奈良に帰郷した際の歌や旅の歌など、静穏な光景を詠んだものが多く、二〇〇六年夏に訪れたアウシエビツツに取材する歌群は七十首にも及んで異彩を放つ。

ここにただ仰ぎてみたり青空を割がれつづける場所の記憶を

「圧倒的な死の光景を前にして立ち尽くすしかない」(あとがき) 状況を歌にしようともかく作者に浮かんだのが(場所の記憶)という言葉であった。

あとがきによれば、書名となったこの言葉に作者が思いを馳せたときがもう一度あった。それは作者が「ただひとりの師」と呼ぶ故前登志夫氏の持山を歩いたときで、横山に雨あがりたり 天空に青い粒子のきみ還在すの作を生んだ。

ある場所の風景の中に、かつて確かな生の跡を刻み、今は存在しない人々の息吹を本能的に感じ取る作者ならではの思いの強さに満ちた歌集である。(久保田智栄子)

喜多昭夫歌集
『青霊』

(ながらみ書房)

つばさ短歌会主宰者である作者の第四歌集。あとがきには「この六年間はとりわけ照り翳りが多く、人生の深淵にいくらか手が届いたやうに思ふ。」とある。

宇宙食と思へば愉しほそりたる飲食の果て師はのたまへり
病室の壁に「氣力」を掲げたる師よ青霊がそこに來てゐる

みどりごは銀河のやうにかたはらに置かれてしづか秋の産院
はじめての寝返りをうちみどりこのな
らんもなかつたやうな顔する
幼子のはじめて二本足に立つ にかつと笑ひべしやんとしやがむ
シャガールの男と女飛びながらくちづけするはなんととも愉快
師であった春日井建氏の死とわが子の誕生、ここには掲げなかつたが父の死や自身のおうつ病を詠った歌、また、シャガールの歌のような軽やかで楽しい歌もあり、まさに「照り」と「翳り」を感じさせる一冊となっている。

(大橋 恵美)

森尻理恵歌集
『S坂』

(本阿弥書士)

まずタイトルがよい。S坂とは森鷗外が小説の中でニツクネームをつけたらしい。頁を繰ると、たちまち理系の研究職である著者の仕事、日常が軽やかに、ユーモラスにうたわれている。

測るのは重力、時刻、位置、気圧、露頭があれば帯磁率加え

「何ですか」と聞かれたときに言うせりふ「国の仕事で地盤の調査」

理系の研究者の仕事とは、屋外を走り回る肉体労働であり、求められる成果も想像以上に大きいということに気づかされる。しかし、歌はからりとした伸びやかさと力の手触りを感じる。印象的な職業詠以外にも、子供を歌ったものも魅力的だ。その気負いない着眼点、ユーモア、そのくせどきりとさせられる真実に胸をつかれ、我が内を思い返らせる。

一日くらい怒らない日を作つてと飯こぼしつづ子は言いつのる
ああやはり開成なんだと子が言えりエリート茂吉の始まりを指し

(斎藤 美衣)